

## 矯正教育における自分を見つめなおす指導

### ～Try検査を用いて～

#### An approach for changing Self-image in correctional education

#### —From a result of Try-Test for inmates—

船引 聡子\*  
Satoko FUNABIKI

鐘ヶ江 香菜\*\*  
Kana KANEGAE

尾崎 啓子\*\*\*  
Keiko OZAKI

### 1 はじめに

少年院に送致されてくる少年はいわゆる非行少年であり、凶悪であるというイメージを持つ人も多いかもしれない。事実、世間を騒がせるような凶悪な事件を起こして少年院に送致されてくる少年もいる。

少年院の教育は様々な分野から構成されている。限られた時間の中で矯正教育を行い、少年たちを社会へ送り出すことは少年院に与えられている使命である。

効果的な教育を行うには、何に焦点を当てて教育を行っているのか、目的を達成するために現状の方法は有効なのか、等内容の見直しを行っていく必要がある。

本研究に対して、少年たちに自分の良さばかり探させることは事件の反省に繋がらないのではないか、と疑問を抱く人も多いかもしれない。もちろん、自分の良さだけ見つめていては矯正教育とは言えない。

今回、その見直し作業の中で、今までの教育に加え、少年の自信のなさや劣等感の強さを教育の中で変容させることはできないかと考えた。適切に自分自身を見つめることは、少年たちが社会に出たときに必要な力である。また、自分に対する見方を変えることができれば、他者に対する見方も変えることができるかもしれない。その視点の転換は家族関係の改善や対人関係の見直しに繋がる可能性がある。

そのような考えから、著者の在籍する少年院で本授業を始めて、今年で3年目になる。本授業の3年間の取組みについて、その展開を紹介し、授業の効果や今後の課題について検討する。

### 2 1年目の取組み

#### (1) 実施時期

2008年5月～7月にかけて週1回程度実施した。

#### (2) 参加した少年

X寮在籍の女子少年に対して実施した。

#### (3) 授業内容

授業は7つの単元から構成した。各単元の概要を紹介する。

単元1はオリエンテーションとして、本講座の目的を理解させ、個性発見検査TRYを実施した。検査実施に際しては、自己の新たな面を見つけるための検査であり、性格の優劣を決めるためのものではないことを十分に説明した。

単元2では自己の良い面に目を向けさせることを目的とし、ワークシートを用いて自分の長所に焦点を当てた自己紹介を実施した。具体的には、得意なことや自慢できることといった項目を盛り込み記載した内容を最初は3～4人のグループで発表を行い、最後は全員の前で発表させた。

単元3では、なりたい自分への意識を持たせることを目的に授業を実施した。なりたい自分とはどんな自分か、そしてそんな自分になるためにはどのような方法を用いたら良いかを考えさせ、発表を行った。その後、発表を聞いた少年から「こんな方法はどうだろう？」というアドバイスシートの手渡しを行った。

単元4では、自分の価値を認め、自分を肯定する気持ちを育てることを目的に授業を実施した。事前に用意した個人の顔写真を見ながら自分の好きなところやチャームポイントをワークシートに記載させ発表させた後、発

\* 交野女子学院／埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター研究員

\*\* 京都医療少年院

\*\*\* 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

表を聞いた他の少年から見たいところも発表させた。単元5では他者の良いところを見つけることで、自己の良さにも気づける力を育てることを目的に授業を実施した。小人数のグループに分かれて、グループ内の少年全員に対して「〇〇さんのいいところ」と書かれたワークシートを記載し、グループ内で発表させ、その後全員の前でも発表を行った。

単元6では他者の良いところを見つけ、さらにそれを相手に伝えたときの相手の反応を感じ、自分の言葉で他者を喜ばせることができる、という自己の価値を向上させることを目的に授業を行った。授業に参加している全員に対して、人ひとりに「あなたの素敵なところは・・・」で始まる手紙を書かせ、相手少年の前で音読して手紙を手渡した。手紙をもらった少年は、手紙の返事を書き、返事を音読してから手紙を手渡すこととした。

単元7では今までの成功体験を思い出させ、努力すれば目標は達成できるということを自己の経験から学ばせ、今後の生活の意欲喚起につなげることを目標とした。これから挑戦したいことをワークシートに記載させ、それを達成するための自分への応援メッセージを考えさせ、それを全員の前で発表させた。

#### (4) 結果

授業の効果を検証するため、個性発見検査TRYの数値データの比較・職員の主観的分析・少年自身の主観的分析を行った。

個性発見検査TRYのデータは全体的に初回実施の数値より、授業実施後に実施した数値の方が高くなったが、検査を実施した人数は10名不足と少数であり、数値の比較をすることはできなかった。

次に職員の主観的分析である。本来、結果の検証をする際、主観を交えての分析は信憑性に欠けるものであろうが、授業を実施し、少年たちの変化を肌で感じた職員の主観も結果の一部として紹介する。

全7回の指導を通して、自分を見つめ、気持ちを前向きに表現する過程には4つの段階が見受けられた。

1段階目は「戸惑い」、2段階目は「安心」、3段階目は「喜び」、最後に「自己実現への意欲」の段階であった。

最初の授業では、自己を肯定的に見ることができず、少年たちは自分の良さを見ることに戸惑っていた。しかし、戸惑いながらも自分の良い面を挙げていき、それを他者が肯定してくれることで安心して自分の良い面を見つめることができるようになっていった。そして、自分でも自分の良い面を肯定することができ、他者に認められた安心感が徐々に喜びへと変化していった。他者に認められ、喜びを感じることで自信を持つことができ、過去の成功体験を迷うことなく話したり、これから達成したいことについても現実的で前向きなもの考えることができるようになっていった。

最後に少年自身による主観的分析である。授業を終え、ヶ月が経った頃、授業を受けた少年が授業をどのように自身の中に意味づけているかを知るため、面接を行った。

授業に継続して参加することができた少年2名に面接を実施し、「授業のおかげで自信を付けることができた」という語りを得ることができた。少年自身が、本授業を自己の変容のきっかけとして位置付けていることがうかがえた。

#### (5) 課題

客観的指標として用いた個性発見検査TRYの数値は、母集団が少なく、数値の比較を行っても信頼性が得られないものであった。当院に入院してくる少年の人数を考え、今後も信頼性の得られる母集団を得ることは難しい。このことから、数値データに頼らない結果の分析方法を考える必要と個性発見検査TRYの活用方法について再考する必要があるという課題が見えてきた。

また、当院は医療少年院という特質上、精神的に疾患を抱える少年も在院している。精神的に安定せず毎週の決まった授業に参加できない少年や、体を起こし、1時間の授業に参加する体力もない少年もおり、今回の全7単元に全て参加できたのは2名しかいなかった。参加対象者全員が受講できる授業形態を考える必要があるという課題も得ることができた。

1年目の授業は少年同士の交流を重視した構成となっていたが、人ひとりの着眼点は実に様々で話の軸がぶれてしまうこともあり、職員の細かな誘導が必要であった。少年同士の自発的な取組み姿勢を支援しつつも、目的に沿った授業を実施するために、指導者側にも明確な指導の軸を設定しておくことも課題として残された。

### 3 2年目の取組み

#### (1) 実施時期

2009年6月～8月の間で、週1回70分程度実施した。

#### (2) 参加した少年

X寮の男子少年9名、Y寮の男子少年6名、Z寮の女子少年5名に対して実施した。

#### (3) 1年目に得られた課題に対する改善策

1年目の授業からは前述のとおり、主に3点の課題が得られた。

1点目の個性発見検査TRYの使い方については、検査の特徴を活かすことができる工夫を行った。TRYの検査結果には、長所も短所も個性のひとつであり、個性は良い悪いと評価されるものではない、との姿勢が強く現れている。2年目の指導案には、その特徴を活かし、発想の転換を図る材料として検査結果を用いることとした。

2点目の課題であった、継続的な参加が困難であるこ

とについては、単元数の大幅な削減を行うことで対処した。

また、3点目の課題であった話の軸のぶれについても、TRYの結果が示す14の項目に関連するものみに限定して考えさせることとし、少年に対しても職員に対しても明確な指標を作った。

#### (4) 指導案

前項に記述したとおり、1年目と比較して単元数は大幅に削減した。単元を減らすことは指導内容が減り、教育の効果も薄れるのではないかと危惧される。実際単元数削減には大きな不安があったが、少年たちの何にアプローチしたいのか、そのために最も必要なことは何なのかを考え、単元の編成を行った。

単元は4単元で構成した。

単元1では個性発見検査TRYの実施とその意義について授業を行った。少年に対して、自己の良い面をのぼしたり、短所に対する捉え方を変えていくためには自分をよく知ることが大切であり、TRYはそのための材料となることを説明した。

単元2では、TRYと自己評価の比較を行った。実際返却されたTRYの結果をグラフで打ち出し、あらかじめ別紙に記入させておいた自己評価をそのグラフに記入させ、検査結果と自己評価の比較を行った。

単元3では自己紹介という形をとりながら、自己の良い面に関する発表を行った。自己紹介の内容は、血液型や好きな食べ物といった答え易いものから始まり、自分のいいところを記入するワークシートで、それを埋めて発表を行う。しかし、自分のいいところを書くのは抵抗が強いと思われるため、TRYの検査結果の言葉を用いて記入しても良いという工夫を取り入れた。

単元4では否定的に捉えていた自己を捉えなおすことを目的に授業を実施した。本単元では単元2で用いたグラフを配布し、自己評価と検査の結果が低い値を示した3項目について捉えなおしを行わせた。

手順としては、少年を3人程度のグループにわけ、各個人が選んだ3項目について話し合いを行わせた。話し合いが終わるといったんグループを解散させ、各自、自分に宛てたアドバイスレターを作成させた。アドバイスレターは記載後、全員の前で発表させた。

#### (5) 結果

2年目の授業では分析軸を設けず、少年が感じたこと、口にしたことをそのまま授業の効果として提示する。

4単元という短い授業構成であったが、単元数を思い切って減らしたことで、授業に参加する予定であった少年は最後まで授業に参加することができた。そして、その少ない単元の中で少年たちは指導者が意図していた変化を口にしていた。

具体的場面を紹介すると、A少年は自分のことを「すぐに諦めてしまう」と否定的にしか捉えられないでいた

が、他者から日常生活で尊敬している部分を具体的に挙げられ、「自分を認めてもらえているようで嬉しい。」と自己の良い面に気づくことができた。またB少年は自己をマイペースで人に合わせられないと捉えていたが、他者から、周囲が不調になっていても自分のやるべきことはやり遂げており、見習いたいと言われたことで「マイペースも悪くないんだ。」と感ずることができていた。

本授業で目指したのは、少年同士の交流を通じて相手の良さを相手に気付かせること、そして気付いた本人はそれを自信として身につけること、である。短い単元であったが、4単元終了後に実施したアンケート調査では「自分に対する見方が変わった。」「新たな個性に目を向けることができた。」といった前向きな意見が多く記載されていた。

#### (6) 課題

単元数を大幅に減らしたことで継続して授業を受けられる人数が増えたが、斉授業に参加できない少年への対応は不十分であり、継続して授業を受けさせるとともに、個別対応の工夫が必要であった。

### 3 3年目の取組み

#### (1) 実施時期

2010年5月～7月

#### (2) 参加した少年

X寮の男子少年19名、Y寮の男子少年16名、Z寮の女子少年8名の計43名に対して実施した。

#### (3) 2年目に得られた課題に対する改善策

課題として、これまでは矯正教育上、集団処遇という斉授業に参加可能な少年を主な対象者として位置付け、各単元の授業を実施した。しかし、3年目は単独処遇という、斉授業に参加困難な少年にも対応するため、単元3に単独処遇少年への対応の項目を追加した。

#### (4) 指導案

単元1および2は昨年までと同様の内容で実施した。単元3では斉授業が可能な集団処遇の少年のみでなく、授業に参加できない少年に対して個別に対応するため、授業内で集団処遇の少年たちから単独処遇の少年一人ひとりに長所をアドバイスレターに書いてもらい、職員が読み上げる方法をとった。単独処遇の少年は単元3で終了した。

単元4ではTRYの結果で明らかになった自己の短所を認識する項目を新たに加えた。

これは、TRY検査の結果により『短所の正当化』をし、非行に至った自己の問題点から目をそらさせないためである。「自分を大切にするため」にも自分の特性を正しく理解させる必要があり、修正すべきなのかどうかを含め

て検討させる狙いがあった。

#### (5) 結果

全4単元の授業終了後に感想を自由記述で尋ねると「みんなが自分を見てくれていること」「気付かなかった長所を言われたこと」など、これまで同様、自己イメージの積極的な捉えなおしの効果が見られた。また、特筆すべきは「人に対して意見が言えたこと」という他者の存在を意識の獲得とともに集団への帰属性が向上したことである。

方で、短所も見方を変えれば長所になるというTRY検査の特性に違和感を持ち「悪い所も良い所としてとらえるのは、どうかと思いました」と明確に短所を表現してほしいという気持ちもみられた。これは、少年同士が面と向かって短所の指摘をしあうことが困難であり、授業内で明確に短所を認識し、修正の検討と結びつきにくかったためと考えられる。

また、個別対応した単独処遇の少年は集団処遇の少年からのアドバイザーを受け取り、自己イメージの積極的な変化が見られた。

## 4 考察

3年目の新たな取り組みとして、自己の問題点から逃げないために短所の認識・修正の検討を追加したが、明確な効果は得られなかった。これは普段から他人を非難しないよう、指導されており、短所の指摘をし合う土壌がなかったことが大きな原因と考えられる。他者から見れば短所ではないこともある点の気付きには至っているため、今後は短所を認識・修正させるための授業の工夫が必要であろう。

また、他人から指摘された長所についても少年によって受け取り方にズレがあり、自分を正当化する手段に利用する傾向も見られた。自分自身を適切に見つめ、自信のなさや劣等感を変容させるとともに、短所の自覚を促すような指導に取り組む必要がある。

非行少年たちの自己イメージは否定的なものであり、自分の長所をすんなりと受け入れるだけの準備性がないことが多い。逆にこれまでの人生で短所については嫌というほど目の当たりにしてきたためか、自分を大切にしたいという意識は薄い。

矯正教育において自分自身の適切な捉えなおしは、自己イメージを変容させ、「自分を大切にしよう」という意識を喚起し、二度と非行に走らないために行ういわば自立のための援助とも言えるのではないだろうか。